

北部タイ平地社会における「ランナー主義」の現代的再定位

Modern Re-contextualization of “Lanna-ism” in Lowland Northern Thai Society

齋藤 俊介*

SAITO Shunsuke

In this paper, the movement for aspiring Khon Muang identity called “Lanna-ism (*lanna niyom*)” is discussed. To articulate the context of Lanna-ism, this paper focuses on the transformation of the way it is represented pertaining to “Lanna” and “Khon Muang” in discourses. Identity of Khon Muang tends to be attributed to Lanna, the traditional political autonomy of Northern Thailand during 13th to 19th centuries. In general, Khon Muang is recognized as the multi-ethnic category of Tai ethnicity in Northern Thailand. However, there is still no fixed implication for Khon Muang. In lowland Northern Thai society, native public intellectuals have been identifying themselves by showing cultural superiority over the Central on media from the mid-20th century. It seems a passive way of redefining Lanna identity in a sense, because the overcentralized administration didn’t allow them to express political claims. After the 1980s, however, local society encountered serious problems caused by government-led massive development. Native public intellectuals felt a sense of danger in that situation. It encouraged them to drive for claiming not only cultural agendas but also political agendas. In dynamics of real politics, there was a slight semantic turn in terms of “Lanna” and “Khon Muang”.

1. はじめに

本稿は、北部タイ平地社会で最大のエスニック集団とされる、コン・ムアン (*khon muang*) によるアイデンティティの直接的、間接的な表出のされ方に着目する。より端的には、「ランナー¹⁾主義 (*lanna niyom*)」と呼ばれる、緩やかな共同性の認識に基づく政治的主張を取り上げる。ランナー主義はコン・ムアンの自己定義のありように深く関わっており、その端緒は20世紀中葉からすでにみられる。一貫していえるのは、現在に至るまでコン・ムアンのアイデンティティ表象のあ

り方の多くが、北部タイ固有の歴史や文化への学術的洞察に基づいているということである。

例えば、北部タイにみられる伝統的な呪物信仰にまつわる研究 [e.g. Kraisri 1966] や、「野菜は籠に、奴隷は街に (*kep phak sai saa kep khaa sai muang*)」と形容される、ランナー王国が18世紀後半に経験した、近隣諸ムアン²⁾からの住民の大量強制移住に対する考察 [e.g. Kraisri 1965]、ランナー王国が勃興したとされる13世紀末から終焉を迎えた19世紀末までの、大局的な推移を扱った歴史研究 [e.g. Aroonrut 2000; Sarasawadee 2005 (2001)]、あるいはコン・ムアンの民族的な

*首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程

多様性と歴史的出自のかかわりに着目した研究 [e.g. Chayan 2000] など、ランナー学 (*lammakhadii suksaa*) として位置づけられる研究の成果はこれまで多く世に問われてきた。

しかしながら、何故ランナーというまとまりやコン・ムアンというカテゴリーが殊更に強調されるのか。しかも、なぜそれが北部タイ平地社会の人々を熱狂的に巻き込むというわけでもなく、かといって下火になるわけでもなく、一定程度の熱量を保ったまま脈々と続いてきたのか。これらの点については、考察の余地が残されている。

以下、本稿の構成は、三つに大別される。次の第2章ではランナー王国の歴史を概観し、コン・ムアンの定義について、先行研究を交えながら検討する。そのうえでランナー主義が成立した背景についても説明を加える。第3章では、20世紀後半以降の北部タイ平地社会の状況について、ランナー主義に裏打ちされた言説から読み解く。具体的には、第二次世界大戦後よりみられ1950年代に入り活発化する地方大学設立運動と、時期をほぼ同じくする地方メディアの発達、および1980年代以降に加速する地方開発と地方分権運動、2000年代以降のタクシン (Taksin Chinawatra) の政治的台頭に着目する。第4章は、ランナー主義が展開されるなかで、「ランナー」というまとまりが語られてきた文脈と、その担い手となってきた「コン・ムアン」の位置づけについて考察し、そこには微妙な意味合いの変化がみられることを明らかにする。

ランナー独自の文化、歴史を謳う発言の顕在化には、中央に対する文化的な優位性を消極的に誇示している側面がある。中央に対する潜在的な対抗意識を根底に抱えつつも、近代タイ国家が成

立して半世紀が過ぎた20世紀中葉には、過度に中央集権的な行政機構も既に固定化されていた。ここでは政治的自律性の獲得を志向した発言は憚られていた。しかしながら1980年代以降、中央と地方間の格差拡大を背景に、徐々にではあるが、「ランナー」や「コン・ムアン」にまつわる表象が、政治的主張と結び付けられる場面も出てくる。

本稿ではランナー主義を、北部タイ平地社会の知識人が展開する、ランナー地域固有の歴史や伝統的価値観、ランナーという文化的なまとまりの強調を志向するイデオロギーとして位置づける。そのうえで、ランナー主義が文化的な主張を前景化させながらも、一方で、過度に中央集権的な行政構造への不満などを取り込みつつ、ある種のアクティビズムとしても成立していった過程を示す。

2. コン・ムアンとランナー主義

(1) ランナー王国略史

タイは、大きく中部、北部、東北部、東部、南部の五つの地域に分けられ、各地域が地形上の制約により、異なった政治支配圏、文化圏を生み出してきた。北部タイの場合、諸山脈が集中するなかに、ピン (Ping)、ワン (Wang)、ヨム (Yom)、ナン (Nan) の四大河川が南北に流れて盆地を形成し、他の地域と隔てられている。このような山間盆地の一つに位置するのがチェンマイである。

北部タイの中心都市であるチェンマイは、13世紀後半、マンラーイ王 (Mangrai) の治世以来、ランナーと呼ばれた伝統的政体の要として繁栄

してきた。一方でランナーという言葉が指し示す範囲は、常に流動的であってもきた。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、バンコクを都とするシャム王国により、近代タイ国家の一地方として併合されるまで、ランナー地域は上座仏教文化圏の確立と13世紀に端を発するタイ系諸集団の興隆に平行する形で顕在化してきた、多くの地理的、文化的まとまりの一つにすぎなかった〔綾部1993:68〕。今日の北部タイ山間盆地各地のムアンを主体としながら、その範疇は一時期チェントウン（ミャンマー、シャン州）やツェンフン（中国、雲南省西双版纳タイ族自治州）まで及び、ルアンパバーン（ラオス北部）のランサーン朝とも緊密な関係を有した〔飯島1998:104〕。

ランナー王国は16世紀後半から18世紀後半の約200年にわたりタウングー朝ビルマの支配下に置かれるも、最終的にはカーウィラ王（Kawila）によって独立を回復する。当時、カーウィラ王が人口増加政策の一環として近隣諸ムアンから住民を強制移入させる政策をとった結果、元来ランナー地域の中核をなしていたユアン（Yuan）に加え、ルー（Lue）やクーン（Khoen）、ヨン（Yong）、タイ・ヤイ（Tai Yai）なども移入してくる〔Sarassawadee 2005（2001）:131-138, 219-221〕。

後の19世紀後半、チーク材に関わる利権が、当該産業に参入した英国と、天然資源を豊富に抱えるランナー王国との二国間外交の一つの争点となる。当時、各々の首長が統治する複数の小ムアンによって構成されていたランナー地域は、階層のかつ複合的な政治権力関係によって成り立っていた〔トンチャイ2003（1994）:178-189〕。この状況に当惑した英国側は、空間的な曖昧さを残さない国境線を引いて、国家の絶対的な主権領域

を確立させ、チーク伐採、輸出にかかわる既得権益の帰属を明確にし、シャム王国を一元的な窓口としてチーク材取引を行うことを画策する。

一方、シャム王国では時期をほぼ同じくして、メコン川流域、マレー半島部をフランス、英国との領土をめぐる係争の末に割譲するなど、領土喪失の危機が迫る。そうしたなか、既存の伝統的な統治形態を、排他的な主権領域に基づいた中央集権的統治に置換する方向へと舵を切る〔トンチャイ2003（1994）:199-207〕。結果、シャム王国によるランナー地域への統治介入は段階的に進んでいく。ラーマ五世王（チュラロンコーン王、1968-1910年在位）と、チェンマイ王家王女のダーラー・ラッサミー（Dara Rasami）との婚約にみられるように、ランナー王国とシャム王国間の外交関係は緊密さを増す。1899年、ランナー王国は近代タイ国家を構成する一地方として中央集権的な統治制度に取り込まれ、実質的に併合される〔Sarassawadee 2005（2001）:201-213〕。

(2) コン・ムアンとは誰か

コン・ムアンの定義について、これまで実に多様な線引きが各先行研究でなされてきた。特定の説に軍配をあげるのは本稿が意図するところではないものの、以下の飯島〔2014〕の説明は正鵠を射ている。

今日「コン・ムアン」は「タイ国北部の人々が最も普通に自称する名前」としてタイ国の内外で知られている。「コン（Khon 人）」と「ムアン（Muang クニ）」というタイ語のありふれた普通名詞を組み合わせたこの語が固有の「民族名称（ethnonym）」のごとく用いられるように

なった歴史は、しかし思いのほか浅い [飯島 2014 : 76]

飯島は、ランナー地域が専門の歴史学者であるアルンラットの「貝葉写本³⁾の調査においてユアンに関する記述は発見できるが、コン・ムアンという用語はついで見かけなかった」 [Aroonrut 2000 : 37] という証言を引き合いに出し、文献を用例にたどる場合のコン・ムアンという呼称の出現時期を20世紀中葉に求める [飯島 2014 : 80-81]。北部タイにまつわる民族誌のなかには、「コン・ムアンという用語を使用した最も初期の書物については、20世紀以降のものであったと記憶している」 [Rhum 1994 : 3] という報告もある。

先行研究によっては、「シャム王国の行政介入により既得権益を剥奪され、中央集権的な行政改革に不満を感じた人々がいた。彼らは、中央(シャム)とは異なるまとまりとして北部タイの人々を位置づけるという目的のもと、コン・ムアンの名を徐々に普及させていった」 [Tanet 2009 : 25-37] というものもある。しかしこの説明は、コン・ムアンという名の通時的変遷について、史資料を欠いていることを認めたくえで述べられたものである。あるいは、18世紀後半のランナー王国の再興期にその起源を求め、カーウイラ王の強制移住政策によって近隣諸ムアンから移入してきた集団と、ユアンを主とする元々住んでいた集団とを差別化するため、ローカルのユアンが「コン・ムアン」を自称するようになった、という説もある [e.g. Suraphon 1999]。

コン・ムアンという名の出現時期、とくに実証がほぼ不可能な口語上の出現時期については、研究者により解釈が異なってくる。こうした解釈の

幅は、何に起因するのだろうか。考えられるのは、より遡及的な定義づけを行うことで、コン・ムアンのアイデンティティに歴史的な正当性を担保させたいという、後の知識人たちによる、ある種のイデオロギーが働いていた、ということである。

コン・ムアンは、いわゆるタイ系エスニック集団 (*klum chaatiphān tai*) のように、出自や歴史を一元的に定義することが難しい。コン・ムアンという名が意味する範疇は対外的に曖昧であり、対内的にも相互認識の齟齬がある。

他のカテゴリーとの相違や関わりについて言及するならば、例えばユアンは、北部タイにおけるタイ系エスニック集団の一つであり、かつてはランナー王国において中心的な位置を占めていた民族である。彼らによる「本当のコン・ムアン (*khon muang tae tae*) は我々である」という言い回しは、現地社会において一般的である。彼らにとってみると、コン・ムアンとしてカテゴライズできるのはユアンのみであり、他のタイ系集団をコン・ムアンとして認めることには躊躇いがある⁴⁾。根底には、コン・ムアンというカテゴリーにまつわり、ユアンを頂点としたエスニックなヒエラルヒーが存在することがいえる。一方、ラッタナーコーシン朝初期に、チェンセーン、チェンラーイ、パヤオ等から、現在の中部タイ、東北タイ各地へと移住したユアンのなかには、自らをユアンないしタイ・ユアンと呼び、コン・ムアンという呼称を知らなかった者もいた [e.g. Tanet 2009 : 7] という事例もある。

ユアン以外のタイ系諸集団について、ルーについて調査したモアマンは、「ルー」というラベル自体、一つの共有された文化、社会を持つ集団に付けられるものではなく、ルー/北タイ人/タイ

国民という具合に、文脈に応じて状況可変的に使用されるアイデンティティの一つとして位置づけられていることを明らかにした [Moerman 1965 : 1215-1230]。モアマンは「北部タイにおけるタイ系諸集団の区分は出身のムアンに起因しており、本質的に政治性を孕んでいる」といい、ルーはツェンフン（中国、雲南省西双版纳タイ族自治州）、クーンはチェントウン（ミャンマー、シャン州）、プータイはテーン（ベトナム、ディエンビエン省）、ユアンはランナーといった具合に、出身のムアンに応じ「民族」が区分されていることも指摘した [Moerman 1965 : 1218-1219]。「民族の名は、もはや存在しない歴史上のクニを書き留めるものである」 [Moerman 1965 : 1219] というモアマンの洞察は、タイ系エスニック集団の名が、本来は「王国（ムアン）の民」を指すことを示している。モアマンの指摘に依拠するならば、「タイ系エスニック集団」について、元々は出身ムアンをその名によって表し、それ以上の意味は持たなかったのが、時代を下るにつれて、エスニック集団のように認識されるようになった、ということがいえる。

先述した通り、中部タイや東北タイにある北部タイからの移住者の村では、ユアンを自称するなど、移住者が本来の出身ムアンの名を名乗る事例 [e.g. Tanet 2009 : 7] がある一方、北部タイへと流れ着いた移住者がコン・ムアンのカテゴリーに包摂されるという事例もある。チャヤンは、「現在、コン・ムアンを自称する北部タイの人々の多くは、かつては異なる民族的出自を持っていた」 [Chayan 2000 : 89] と指摘する。例として、コン・ムアン村落とされるチェンマイ県ハーンドン郡ムアンクン村の村民はビルマ人を、サンパー

トーン郡カート村はタイ・ヤイの行商を、チョームトーン郡の村落群はラウ人を祖先にもつことを挙げる。その他にも、チェンマイ県サンカンペン郡の村落群、ランパーン県のパーサーン郡、メーター郡、ムアン郡の村落群はタイ・ヨーンに、チェンマイ県ドーイサケット郡、サンサーイ郡、サムン郡の村落群はタイ・ルーに元々の出自を持つ [Chayan 2000 : 89-90]。

コン・ムアンという呼称の出現時期について話を戻すが、史資料からたどる場合、20世紀中葉にその起源を求めることができるものの、口語の出現時期については、研究者によって大きな時間軸上の幅と解釈の相違がある。

ランナー王国を構成していた人々にとって、19世紀後半から20世紀前半は、アイデンティティの拠り所であったランナー王国そのものが消失し、シャムによる中央集権的な行政改革のもと、一地方州として再編された時期であった。当初、ラーオ州 (*monthon lao chiang*) と名付けられていたことから、現在のような北部タイ／東北タイ／中央タイという区切りはまだ浸透しておらず、中央からしてみると存在したのは、中央とそれ以外の辺境、という認識であったことが読み取れる。ランナー地域の人々は当時、「ラーオ」、あるいは彼らの腹部にイレズミを入れる習慣をもじって「腹黒のラーオ (*lao phung dam*)」と呼ばれていた [e.g. Lebar (eds.) 1964 ; McGilvary 2001 (1912)]。こうした事情からは、シャムという相対的により大きな政体に包摂され、「辺境」の人々として括られることに反感を覚える一部の人々によって、「ラーオ」ではない代替的なアイデンティティの根拠となりうる概念として、「コン・ムアン」という呼称が徐々に浸透していったことが考えられ

る。そして「コン・ムアン」という呼称は後に、北部タイのネイティブの知識人たちによって、多様な民族のまとまりであった旧ランナー王国の人々と北部タイ全体を広く包摂する概念として、学術的に縁取られていく。

(3) ネイティブの知識人たち

ランナー王国が国民国家としてのタイに取り込まれてほぼ半世紀が経った1950年代頃から、北部タイの知識人たち [e.g. Kraisri] は、マス・メディアを通じて旧ランナー王国期の歴史や固有の文化にまつわる論考を発信し始める。これは、ランナー主義の萌芽ともいえる。さらに1980年代後半になると、こうした旧ランナー王国期の歴史や固有の文化は、再評価されるようになる。政治学者のタネート (Tanet Charoenmuang)⁵⁾ は、全国版の政治経済紙『プー・チャットカーン』への1989年から1990年にまたがるコラム連載を皮切りに、ランナー・アイデンティティに裏打ちされた発言を続ける。他にも、サラッサワディー (Sarassawadee Ongsakul) が叙し、2001年の改稿を経て現在まで版を重ねる『ランナーの歴史 (prawatisaat lanna)』が1986年に上梓される。ランナー主義の展開に目を向けてみると、北部タイ随一の高等教育機関であるチェンマイ大学、とりわけ人文・社会科学系の教授陣 [e.g. Kraisri ; Sarassawadee ; Tanet] が果たしてきた役割は大きい。

3. ランナー主義の展開

(1) 1980年代以前

1980年代をランナー主義の生成過程について

考察する際の一つの分水嶺として考えるならば、それ以前の時期において注目すべきは、1964年のチェンマイ大学設立にまつわる、地方大学設置を求める諸運動、および地方新聞『コン・ムアン』紙の創刊であろう。そこで中心的な役割を果たした人物として、クライシー (Kraisri Nimmanhaeminda)⁶⁾ が挙げられる。ニンマーンヘーミン家はチェンマイでも指折りの名家であり、なかでもクライシーは「ランナータイが生んだ傑物」[赤木 2014 : 28] と評される人物である。

1) 地方大学設置運動

大学設置運動の背景は、クライシーが執筆した「我々には大学が必要である (チェンマイ大学設立の歴史)」[Kraisri 1985 : 199-214] によく示されているため、これに依拠しながら議論を進める。

1958年1月1日に発足したタノーム (Thanom Kittichorn) 内閣は発足直後、大々的な教育改革の施行を宣言した。それは、「政府は大学教育を含めた教育面の地方開発に注力する」というものだった。当時、タイの大学機関はバンコクに数校存在するのみであり、地方大学の設置が本格的に始動した瞬間だった。

少し遡るが、第二次世界大戦後、アメリカ人宣教師らは北部タイを中心に、既に初等部から高等部までの教育機関を設置していた。さらに彼らは、独立運営に基づく大学設置について、正式な嘆願書を政府に提出していた。宣教師たちのなかにはニンマーンヘーミン家に対し、新大学の用地の寄付を願い出る者すらいた。ニンマーンヘーミン家はこの話に大変興味を抱き、三つの条件 (①医学部の設置、②熱帯医学に関する研究所と、十分な

規模の病院の設置、③北部タイ出身の優秀な学生に対する無償教育の制度化)を設け、無償で土地を寄付することに決めた。さらに新大学設置のための推薦状も、政府担当宛に書き添えた。しかしながら政府の見解は、「タイ政府は、国内の大学を設置するにあたり、何人たりとも外国人がそれを行うことを許可しない」[Kraisri 1985:202] というものであった。

その後、チェンマイでの大学設立に関心を抱く人物が新たに現れた。旧ランナー王家にあたるナ・チェンマイ家のケーオモンコン(Kaewmongkhol Na Chiangmai)とその妻、セーダオ(Saengdaao Na Chiangmai)である。二人は自ら所有する土地を、タイ随一の学術機関であり、かつ王室の意向を汲んでいるチュラロンコーン大学へと売却することを提案する。加えて、この地に大学を設置する際には「ダーラー・ラッサミー大学」と命名することを条件として盛り込んだ。売却予定地(現チェンマイ県メーリム郡)には、チュラロンコーン王の王妃であった、ランナー王家出身のダーラー・ラッサミーの旧邸宅があった。この提案には、チュラロンコーン王にちなんで名づけられたチュラロンコーン大学と対になる名前を、この地に設立する大学には名づけてほしい、という意向があった。教育大臣のサワット(Sawad Sawadronnachai Sawadkiet)は二つ返事でこれを認可し、1951年、80ライにおよぶこの土地は数十万バツで取引された[Kraisri 1985:202,205]。しかしその後、大学が設置されることはなかった。教育省は方針を変更し、新大学設立用に分配するはずだった予算を、バンコクの教育機関の拡充にあてがったのである[Kraisri 1985:205]。現在この土地は国境警察の駐屯地となっている。ダーラー・ラッサミーの旧邸

宅はチュラロンコーン大学の管理下で保存され、1980年代後半の修復作業を経て、1990年に一般開放される。

2) 『コン・ムアン』紙の創刊

地方大学設置に向けた一連の運動が活発になると時期を同じくして、北部タイがもつ文化、歴史への関心が高まりはじめる。その最中、週刊新聞紙『コン・ムアン』が創刊される。1953年1月に始まり、1978年に廃刊を迎えた同紙は、北部タイの経済、社会、政治にまつわる質の高い記事を掲載することを理念として掲げていた⁷⁾。

アメリカ人宣教師たちによる大学設立が失敗に終わり、旧ランナー王国の王家から土地を購入したチュラロンコーン大学も新大学設置に取り組みない現状に鑑みて、ある時クライシーは北部タイの大学設置を政府に要求する役割を『コン・ムアン』紙が果たすべきだという考えに至る[Kraisri 1985:204]。そして北部タイでの大学設置の誘致を訴えるコラムを、北タイ語(カム・ムアン)によって連載する[cf. Tanet 2009:53]。

一方で、ランナー文化の地位向上を意図した動きもみられるようになる。例えば、ランナー文化を体現するものとして、「カン・トーク(竹編み細工の脚付き盆(カン)に載せて提供する北タイ料理の盛り合わせ)」、「モー・ホーム(コン・ムアンの民族衣装として知られる藍染めの服)」が挙げられる。これらは、クライシーが『コン・ムアン』紙を通して普及させたものとして知られている。

1953年、クライシーは、交友関係にあった法務省高官のサンヤー・タマサック(Sanya Dharmasakti)⁸⁾と在チェンマイ・アメリカ領事館領事ジョージ・

ホイットニーを自宅に招き、饗応する。二人の友人に「ランナー文化」を楽しんでもらうため趣向を凝らし、クライシー自らが率先してモー・ホームを身に纏い、カン・トークを振る舞い、催しは大盛況に終わった [cf. Tanet 1993a : 44-47]。こうした饗応はその後も数回催される。

翌1954年3月から5月には『コン・ムアン』紙上において、モー・ホームの着用を推奨する記事が掲載され始める [cf. Tanet 1993a : 44-47]。クライシーが主催した饗応から始まり、その場に参列し、感銘を受けた人々、および『コン・ムアン』紙を購読していた上流階級を中心として、徐々にカン・トークとモー・ホームは広がっていく。

1950年代において希少なメディア媒体であった『コン・ムアン』紙を通して、ランナー文化は客体化され始める。『コン・ムアン』紙は地方大学設立運動の原動力となるのみならず、独自の文化や歴史を発掘することで、ランナー・アイデンティティを主張する。そこには、支配的な中央集権体制が確立されて既に半世紀以上が経過した20世紀中葉の旧ランナー王国とバンコク両者の対立構造について、「政治的な変更を求める余裕はもはやなかった彼らにとって、バンコクに対抗する手段は文化的優位性の主張しか残されていなかった」 [赤木 2014 : 28] という、地方-中央間の埋めがたい不均衡があったことが指摘できる。

また当時、「タイ文化」を象徴するものとして喧伝されているものの多くが、本来はランナー文化に属するものであったことが、クライシーをはじめとする北部タイの知識人たちによって示されてきた [cf. 赤木 2014]。バンコク側による、ランナー文化の輸入現象に着目した北部タイの知識人たちは、「ランナーの文化は、中央タイ

のそれよりも高次元にある。なぜなら彼らは我々の文化を輸入し、それを「タイ文化」として示しているからだ」という主張を展開する [cf. 赤木 2014]。

赤木の指摘を参照するならば、ランナーの文化、歴史を掘り起こし、それが高度に洗練されたものである、という点を対外的に知らしめる姿勢が、この時期におけるランナー主義の特徴だといえる。

(2) 1980年代以降

1980年代は、急激な経済成長が人々の生活に恩恵をもたらした始めた時期である。無論、北部タイでも大型資本が本格的に流入する。とくにバンコクをはじめとした外部の投資家によって、広大な土地が買い取られ、コンドミニアム、ホテル、商業施設、リゾート、大型農園、ゴルフ場等が大量建設される。都市部の乱開発は急速な経済発展をもたらす一方、環境汚染や居住環境の悪化、スラム街の拡大、公共福祉時事業の慢性的な不足といった問題群をも引き起こした。開発がもたらした負の側面は、後に活発化する地方分権運動の呼び水となる。さらに2000年代のタックシンの政治的台頭は、知識人たちによるランナー・アイデンティティの主張と部分的に重なり合う。

ここでは主に、タネートの発言を取り上げる。数ある北部タイの知識人たちのなかで、タネートに着目する理由を挙げる。まず、言論人としての知名度の高さである。タネートは1990年から1991年にかけて、政治経済の全国紙『プーチットカーン』に、ランナー主義にまつわるコラムを連載する。1993年には、一連のコラムをまとめた著書が発行される [Tanet 1993a]。また、所属

先のチェンマイ大学社会学部では、90年代半ばに「地方自治研究プロジェクト (*khroongkaan suksaakaan pokkhroong thoong thin*)」が始まる。この研究プロジェクトを通して、精力的に著作を世に送り出すが、そのなかで繰り返し論じる地方自治に関する問題は、リアルポリティクスと密接な関係性を持ち、強い政治イデオロギーを持ったランナー主義を展開する。2000年には、「変動する社会におけるコン・ムアンの役割 (*khon muang nai booribot thaang sangkhom thii prianpraeng*)」と銘打たれたセミナーがチェンマイ大学社会学部の主催により催され、タネートはそこでも中心的な役割を果たした。2000年代以降の著作では、タックシンへの傾倒をみせると共に、タックシンが推進したネオリベラリズムといった政治性と、ランナーの伝統性の共存を主張する。以上のことからタネートの主張は、当時の北部タイの意見を一定程度、代弁しているものといえる。

1) 開発と地方分権

本格的な地方開発の萌芽は、1970年代後半から既にあった。1979年、チェンマイ空港で国際便が就航する [Tanet 1993a : 163]。これはタイ政府による第四次五ヶ年国家経済社会開発計画の施行時期 (1977-1981年) と重なる。同計画に従って政府は、開発上の重点的な拠点となる地方中枢都市⁹⁾としてチェンマイを含んだ五都市を画定し、後に本格的な地方開発に着手する [Tanet 1993a : 163-164]。地方開発政策の詳細は以下、四項目に大別される。

1) 道路、橋、鉄道、市場、排水・下水機構をはじめとした都市インフラ整備

- 2) 貧困層地域に対する住居提供や、公共福祉事業の一環としての生活用水の確保
- 3) 観光産業、商業、中小零細工業の支援
- 4) 地方自治体¹⁰⁾ の運営能力の開発

[Tanet 1993a : 164]

1980年代に入り、チェンマイでは、資本家らによる都市部の乱開発の煽りを受け、大量の人・モノ・資本が流入する。彼らによる大量の土地買占めや、急激な人口増加、およびそれに伴う住宅建設ラッシュは、森林伐採、居住環境の悪化などの諸問題を引き起こす。

この時期のランナー主義に縁取られた諸言説には、ランナー地域の文化的な遺産が形骸化していく状況に対する苦言や、ランナー／コン・ムアンという、ある種の共同体ないし文化的な価値体系の保全を志向した発言が多くみられる。タネートは、チェンマイが直面していた一連の都市問題に対し警鐘を鳴らすとともに、問題を真摯に捉え、解決へと動くことのできる人材は、住民選挙によって選ばれるべき、と主張する [e.g. Tanet 1995]。中央集権的な行政構造をもつタイでは当時、中央から派遣された県知事、郡長が地方自治体首長も兼任するケースが数多くみられた。これを受け、地方自治体首長の座を中央官吏が務める限り、チェンマイの問題を真剣に考える契機は生まれないという危機感が人々を支配していた。中央から派遣された官吏は結局のところ中央復帰を望むのが常であり、真摯に地方の問題に取り組む姿勢を持つ者は少ない。タネートは言う。

従来の価値観を考え改める時期に突入した。故郷の住民が政治の主役となるべきである。もし

この街を住み心地の良いものにしたいのならば、住民はその保護に注力しなければならない。この故郷の為政者を選挙によって選出し、その仕事を監査すべきである [Tanet 1995 : 68]

地方分権を謳う一連の主張が、チェンマイ建都700周年にあたる1996年を意識して展開された点も見逃せない。

我々が地方行政機構の改革を達成したとき、全ての地域住民はこの街の保全に参画し、この街が抱える種々の問題は解決されていくだろう／どうかターサバーン首長の直接選挙制実現を、この度のチェンマイ建都699年を祝う土産としたい [Tanet 1995 : 97-98]

一連の発言からは、1996年というチェンマイが建都されて700周年を迎える節目の年が、知識人たちにとって、ランナー・アイデンティティに基づきながら地方分権を唱える大きな動機づけとなったことが読み取れる。

2) タックシン¹¹⁾の政治的台頭

2000年代以降、ランナー主義の趨勢に大きく影響を与えたのは、タックシンの存在である。チェンマイ県出身のタックシンは2001年2月、北部タイ出身者として初めて首相の地位に昇りつめる。タックシンは北部タイの人々にとって、ある意味、ローカル・ヒーローとも呼べる存在であった。警察官僚から政界へと転身し、51歳にして首相に就任したタックシンはしかし、5年8か月にわたる政権を経て2006年9月、軍部クーデターにより失脚し、国外亡命の憂き目に遭う。同時に地

方分権推進の拠り所となっていた1997年憲法¹²⁾も廃止される。1997年憲法に依拠して計画・実行された地方分権の流れも、同時にその速度を落とさざるを得なくなった。地方分権の停滞、さらに地元の名士であったタックシンの失脚という事実には十分であった。タネートは、明確にタックシン支持の姿勢を打ち出している。

2008年2月28日10時過ぎ、我が国で首相となった史上唯一のコン・ムアン（タックシン）は、2006年9月以来初めて、537日ぶりに母国の地に帰ってきた。〔中略〕 念願の母国への帰参を果たした時、大地に向かって跪拝をした。〔中略〕 かのコン・ムアン（タックシン）が大地に跪拝をしたのは演技である、イメージ戦略のためである、新聞の一面を飾る大きなニュースが欲しかっただけだ、故郷を愛しているふりをしているだけだ、といった報道が一部でなされたが、〔中略〕 周囲の人々はこれをどう見なすべきだろうか [Tanet 2009 : 227 (括弧内筆者)]

タネートは、タックシンが置かれた境遇に共感し、批判を抜きにして礼賛する姿勢を見せる。その姿勢は強い軍政批判へとつながっていく。

軍部は市民の代わりに国家を占領して政府、議会、政党を解散したり、古い憲法を引き裂き、新憲法を起草したりするべきではない。これらの悪事はすべて民主主義政体のために糾弾されるべきである。〔中略〕 こうした考え方は、コンセンサスの取れた、民主主義による社会や平和をつくるための考え方ではなく、権力主義に

よって社会をつくるための考え方である。そして個人の自由を侵害し、離反や分裂を引き起こすものである [Tanet 2009 : 228]

タネートは、タックシンが首相という権力ある立場を利用し、自身に対する批判を展開する者に圧力をかけ、個人の言論の自由を侵害するような行動を取ったことや、タックシン一族が経営する企業への露骨な優遇政策を行ったという事実¹³⁾ [末廣 2009 : 180-216] に関しては沈黙を貫いている。一方、民主主義の信条を盾に取り、2006年9月の軍部によるタックシン政権打倒を目的としたクーデター、および1997年憲法の廃止を明確に批判する。

タックシンにまつわる一連の記述について、負の側面への言及はさほど多くない。言論の自由を侵害するようなメディア規制や、家族、親族、警察学校の同期を重要な役職へ登用する露骨なネポティズム、あるいは異常な蓄財への批判は、陰に隠れがちである。むしろそこには、北部タイという地域性に根ざして、ローカル・ヒーローであるタックシンを無条件に支持するイデオロギーが投影されている。

4. 考察

(1) 「ランナー」の意味合いの変化

この章では、ランナー主義に裏打ちされた一連の言説のなかで、「ランナー」というまとまりが語られてきた文脈と、その担い手となってきた「コン・ムアン」がどういう範疇であり、いかにしてその位置づけを変化させてきたのかという点に着目する。

ランナー (*lanna* / *láanna*) という呼称をめぐる論争が北部タイの言論界を席卷したのは1980年代後半である。標準タイ語は五声調をもつ言語であるが、当時、ランナーという語に関して、第一声調の平声で発音する *lanna* (ᨧᩢ᩠ᨦᩉ᩠ᩅᩢᨯ) と、声調記号マイトーがついた、第四声調の高声で発音する *láanna* (ᨧᩢ᩠ᨦᩉ᩠ᩅᩢᨯ) とが併存していた。郷土史をはじめとした地方への関心が高まるなか、1987年には *lanna* と *láanna* の呼称の正当性をめぐる論争が、北部タイで過熱する [Lamchun 2011 : 56]。言語学者を含めた北部タイの知識層を動員し、地方新聞やラジオを連日賑わせ、全国紙もこれを取り上げるようになる [Lamchun 2011 : 56]。最終的に、政府機関のタイ歴史編纂委員会 (*khana kammakaan chamla prawattisaat thai*) が、「正しい呼称は *láanna* である」という公式の見解を、1987年6月15日に表明する [Lamchun 2011 : 59-60]。

一連の論争において、*lanna* の擁護派は主にランパーン県に、一方、*láanna* の擁護派はチェンマイ県に集中し、両者間で論争が繰り広げられた [Lamchun 2011 : 56]。北部タイの知識人たちは、貝葉文書などの史資料を駆使し、言語学的な見地から標準タイ語とは異なる北タイ語 (カム・ムアン) の独自性を主張もした。他にも、カム・ムアンと標準タイ語の言語的な差異に基づいた比較考察、カム・ムアンにおける *lanna* / *láanna* の原義に立ち返った意味論的な考察など、様々な意見が提出される [Tanet 1993a : 9-11]。こうして北部タイの歴史や文化が掘り起こされ、メディアがそれを拡散することは、地方史に関する人々の興味を引く契機となった [Tanet 1993a : 9-11]。

「ランナー」はこの時期まで、旧ランナー王国が誇る歴史や、過去から連綿と続く「高尚な」

文化から、遡及的かつ連続的に捉えられるものであった。そこには、バンコクに対する対抗意識を持ちつつも、あらゆる側面でバンコクへの一極集中が進んだ現代において、もはや文化的な優位性を示す以外の道が残されていなかったという事情がある。ランナー文化を体現するカン・トークやモー・ホームが人口に膾炙し、知識人たちがカム・ムアンの衰退に警鐘を鳴らし、ランナー王国の歴史や、ランナー王国を構成していた諸ムアンの地方史が積極的にメディアに取り上げられてきた。

しかし、この傾向は1980年代後半を境に変化しはじめる。簡潔にいうと、「ランナー」は、より現実的な政治に関係づけられながら語られることが多くなった。1980年代後半は、中央集権的な行政構造の弊害が噴出した時期でもある。1977-81年の第四次五ヶ年国家経済社会開発計画の綱要であった地方中枢都市の制定とその後の重点的な地方開発は、いわば地方に小バンコクを創り、あらゆる都市機能を各地方の中心都市に詰め込むという、プライメートシティの構想に基づいたものであった。近代タイの成立以降続く、一極集中的な中央集権構造は、こうした地方開発のありかたにも如実に表れ、知識人たちの批判的となる。急激な都市開発による環境悪化、渋滞、公害、資本の過剰流入などの問題が発生するなか、彼らは中央集権的な行政構造の批判、地方分権の要求という政治的な主張を、これまでの文化的な主張に織り交ぜるようになる。

(2) 「コン・ムアン」の位置づけの変化

「コン・ムアンはカム・ムアンを話さなければならぬ」[e.g. Tanet : 1993b] という主張にみら

れるように、一貫してコン・ムアンはランナー文化の担い手として捉えられてきた。とりわけタネートは、カム・ムアンが衰退する状況に危機感を抱き、苦言を呈してきた。

私は教育者でもなければタイ語の教師でもないが、〔中略〕親が子に対してカム・ムアンを話さないのは大いに間違っていることだと考える。これは我々の社会の将来的な発展に悪影響を及ぼすだろう [Tanet 1993b : 11]

かつて、ランナーの大地はカム・ムアンという美しい音色を持つ言葉で満ちていた。それは祖先が常に守り抜いてきた、この地方特有の文化的な特徴であった。ランナーの人々はどうしてこれを守ろうとしないのか。どうして他の地方から来ている者と共に学び、継承しようとするのか [Tanet 1993b : 15]

タネートは、憲法に則って定められ、標準タイ語の教室内での使用が義務化されている現行の教育制度にも言及しながら、その弊害としてランナー地域においてカム・ムアン話者が世代を下るごとに減少してゆく状況の改善を訴える。

時期をほぼ同じくして、ランナー地域の歴史にまつわる多くの著作も、北部タイの知識人たちの手によって世に出ることとなる。そこには、従来の排他的な歴史観の相対化を図ろうとする姿勢が表れている。タネートは、「これまで数百年来、タイ社会はあらゆる面における中枢をバンコクに集約させてきた。地方の人々は自身の故郷の歴史や由来について殆ど知る由もなかった」[Tanet 1997 : 18-19] といい、単線的な王朝史観に基づく従来の歴史教育への疑問を投げかけ、地方史に

ついて学ぶ重要性をたびたび訴えてきた。そのなかで、今日の北部タイの礎をつくりあげた歴史上の偉人たちについて、その歴史を学ぶ必要性を強調もした [Tanet 1993a : 205-212]。こうした発言の背景には、ラーンナー王国、およびラーンナー王国を構成したそれぞれの小ムアンに関する地方史教育こそが、現代に生きるコン・ムアンのアイデンティティを形成するうえで、大きな役割を果たしうるという意識があったことがいえる。

一方、1980年代後半を境目として「コン・ムアンとはいったい誰を指すのか」という議論も過熱する。結果、コン・ムアンというカテゴリーが示す範疇に学術的な定義が加えられていく。そこでは概ね、「行政的に北部タイ上部¹⁴⁾として括られる八県ないし九県に住み、カム・ムアンを使用するタイ系集団の人々は自らをコン・ムアンと自称する」と括られる傾向がある [e.g. Aroonrut 1991 ; Lamchun 2011 ; Tanet 1993a,1997]。しかし実際には、この定義から外れる事例も無数にある。例えばチェンマイ県ウィアンヘーン郡はタイ系集団のなかでもタイ・ヤイが集住している。彼らはカム・ムアンも使用するが、一般的に、コン・ムアンではなくタイ・ヤイを自称する。チェンカム郡をはじめとしてルーが多数集住するパヤオ県においては、彼らは「北部タイ上部に住み、カム・ムアンを使用するタイ系集団」であっても、コン・ムアンとは異なるという自己主張を展開している。先に述べた定義では、こうした個別的な差異は平準化される。

したがって、コン・ムアンの定義に関する一枚岩的な傾向からは、ラーンナー・アイデンティティの広がりを含む理論上の最大値として北部タイ上部全域を想定しながら、可能な限り広汎

な領域におけるアイデンティティの縁取りをすることで、出来るだけ多くの人々をコン・ムアンの名の下に巻き込みたいという、研究者側のある種のエスノセントリックな思考が見え隠れする。

コン・ムアンはラーンナー文化の担い手として位置づけられ学術的に定義づけられる一方、政治的な主張におけるアイデンティティの拠り所としても再定位されていく。1980年代後半以降にみられる地方分権の要求、および1997年憲法公布を一つの頂点とする地方分権の部分的な達成、およびその後の停滞や、タックシンの政治的台頭と失脚という、様々な文脈が絡まり合っている。

(3) 文化的アジェンダから政治的アジェンダへの推移

文化と政治は明確に区別できるものでもないがゆえに安易な同定は避けたいが、誤解を恐れずに言うならば、数々の言説上における「ラーンナー」と「コン・ムアン」の語られ方は、文化的なものからより政治的な色合いを帯びたものへと変容してきている。コン・ムアンへの言及がみられる初期の部類のものとして、1950年初刊の『チェンラーイの30民族 (saamsip chaat nai Chiangrai)』 [Bunchuai 2008 (1950)] が挙げられるが、そこではコン・ムアンは以下のように位置づけられる。

北の民 (*chao nua*)こそが他民族の血が混ざらない、真正なタイ人である。[中略] 北の民はみな、自らが真正なタイ人であると考えており、ラーオと呼ばれることには我慢できないため、コン・ムアンを自称する [Bunchuai 2008 (1950) : 12-13]

ブンチュアイがいう北の民 (*chao nua*) およびコン・ムアンは、バンコクをはじめとした中央タイや、中央政府から派遣されてきた行政官から「辺境」の地であるとみなされ、軽視されることに対する反駁として位置づけられる [cf. 飯島 2014 : 76-81]。北の民という言い回しについても、「北」という方角を入れること自体が、無意識のうちにバンコクや、中央政府から派遣されてきた行政官を中心として想定していることの証左といえるのではないかと [cf. 飯島 1998 : 119]。

独自の言語体系をもつカム・ムアン然り、ランナー王国という伝統的政体を保持していたという歴史然り、「ランナー」とは「コン・ムアン」によって継承されるべき文化的な資源であるという類の主張は、『コン・ムアン』紙の創刊や地方大学設立に向けた運動を通し、人々が再帰的に自己認識を深めていった当時から唱えられていた。1980年代以降は世界的な資本主義の浸透に伴う反動として、共同体文化論 (*wathanatham chumchon*) や土着の知恵論 (*phuum panyaa*) といった、伝統的価値観の称揚を軸とした言説が顕在化する。

タイの共同体文化論は、地方の農村開発に関わる知識人や開発NGOの実践と理論的構築によって生み出されてきた。その思想の要諦とは、「共同体文化を農村と国家の開発における主導的なイデオロギーにするような価値を共同体に取り戻す事、すなわち、国家権力に対抗し、資本主義と交渉できるように、村人と村落共同体を組織する」 [チャティップ 1992 : 545] という、いわば反国家的かつ反資本主義的なものであった。それは、急速に変容しつつあった当時の地方社会において、村人同士の平等かつ対等な互助関係といった、伝統回帰的な価値観に依拠し、住民による参加・自

立型の開発を目指すための理論的土台であった。背景には、国家主導による一元的な開発政策が地方社会を急速に包摂し、そこでの資源管理をめぐる係争が中央政府の関心に上ったことや、地方社会の人々自身が、こうした資源管理へと参入するようになってきたという背景が挙げられる [e.g. 片岡 2002 : 48]。

土着の知恵論もこうした理論的潮流と軌を一にし、民衆が国家や市場など、外部の影響から自立するための方策として編み出される。つまり、伝統的な共同体文化に立ち返り、それを復元させ、そこで復元された伝統的な価値体系がひいては自己や村落社会のアイデンティティを取りもどし、村落社会の各個人が「自立」することにつながる、という論理である [北原 1996 : 100-101]。

ランナー主義もまた、北部タイ平地社会固有の歴史や文化を強調するという点で、伝統文化の復興と維持に重きを置く共同体文化論や土着の知恵論と交差し、その影響を受けていることが窺える。そこでは、旧ランナー王国から連綿と続く歴史や、カム・ムアンをはじめとした固有の文化の素晴らしさが語られ、「伝統の維持」が訴えられる。一方、中央集権的な国家主導による地方開発が進展するなか、居住環境の悪化、公害問題、環境汚染など多岐にわたる問題が各地方社会で顕在化する。解決策の一つとして、地方自治の推進が希求される。

1994年、農村部にタンボン自治体を新設する法案が施行され、1997年には新憲法が公布される。そこでは地方分権推進が国家の基本政策のひとつとして位置づけられる。さらに地方分権計画を策定して定期的な地方分権のチェックを求めた1997年憲法第9章284条に基づき、1999年には地方分

権推進法が制定される [永井 2012: 105-133]。常設の地方分権委員会が地方分権計画を策定し、国家歳出に占める地方歳出の割合を2001年までに20%以上、2006年までに35%以上に引き上げるという数値目標も法的に明記され、地方分権推進は制度的に国家政策のなかへと埋め込まれる [永井 2012: 105-133]。

タンボン自治体の設置や1997年憲法の公布、地方分権推進法の施行といった点において、地方分権化は一定の成功を収める。それまで横行していた地方行政サイドの県知事や郡長による地方自治体（県自治体ないしテーサバーン）の首長兼任が禁止され、地方自治体が組織する議会首長は、みな直接公選制ないし公選議員間による互選制が敷かれるようになる。テーサバーン首長については、住民による直接公選制が導入されるようになる。北部タイ平地社会ではさらなる地方分権化に期待が高まるものの、以後、その流れは停滞してゆく。

2001年にはタックシンが首相に選出される。タックシンが北部タイ出身者として初の首相となったことで、人々は歓喜に沸く。しかし2006年には軍部のクーデターにより失脚し、その後は亡命生活を送ることとなる。地方分権の実質的な頭打ち、タックシンの政治的失脚というかたちで、北部タイの人々は二度において失望させられることとなる。ランナー主義に裏打ちされた言説は、こうした背景のもと、文化的アジェンダから政治的アジェンダへと微妙にその色合いを変えていく。

更にこうした傾向は、思わぬところで、極端な分離主義を志向するイデオロギーとしても噴出する。2014年3月初旬、「ランナー人民民主共和国 (*saatharanarat prachaathipatray prachaachon lanna*: ソーポーポー・ランナー)」として北部

タイ八県の分離独立を画策する一派についての報道が飛び交う。コムチャットルック紙は2014年3月1日付で「赤シャツ受け入れ! ソーポーポー・ランナーの建設 6か月の協議を経て」という見出しで大々的にこれを報じる [Anonymous 2014a]。親タックシン派の有力団体「チェンマイ51グループ」の中心人物、ペッチャワット (Pechawat Watthanapholsrihul) が、ランナー人民民主共和国の分離独立についてグループで6か月以上の討議を重ね、実際の見通しもある程度立っている、とまで語っている [Anonymous 2014a; 赤木 2014: 25-26]。

しかし直後の2014年3月4日、プラチャータイ紙で「ペッチャワットが分離独立の考えがないことを示唆-誤認報道」という見出しの記事が報道される。ペッチャワットは「ソーソーポー・ランナー」がランナー人民民主共和国を意味してはいないこと、タイ国土の分割独立を画策したことは一度もないことを詳細に語り、コムチャットルック紙の記事内容を全面否定する [Anonymous 2014b]。

2日後の2014年3月6日には同紙で「『ソーポーポー・ランナー』の真相 サンカムペーン支部と分離独立の濡れ衣」という記事が掲載される。各方面のメディアがランナー人民民主共和国として誤解していた「ソーポーポー・ランナー」は、「ランナー民主主義保護集会 (*samaccha pokpong prachaathipatray lanna*)」という団体であることが明示される。少し遡った同年2月28日、当時の首相、インラックがチェンマイ県サンカムペーン郡にある「チェンマイOTOPセンター」を訪問した。その際、駆けつけたインラック支持派団体が皆「ソーポーポー・ランナー」と書かれ

たハチマキを頭に巻いていた。そこに端を発し、真偽入り乱れる様々な憶測や誤解が生まれたのではないか、という指摘も記事中でなされている [Anonymous 2014c]。そもそもランナー民主主義保護集会は、中部タイの「民主主義保護集会」を母体とした北部タイの支部であり、主に地方選挙の支援活動を行う、ランナー地域の分離独立とは全く何の脈絡もない団体である。

「ソーポーポー・ランナー」の頭文字をめぐる生じた誤認とそれに対する抗議を通してにわかに熱を帯びた報道は、一見、荒唐無稽なものにみえるのかもしれない。しかしながら、ランナー主義が、政治的な色をこれまでも増して強く帯びつつあることを、暗に示している事例として考えることもできる。

5. おわりに

ここまでみてきたように、ランナー主義が進展した背景には、まず中央タイへの対抗意識が根底にある。「ランナー」というまとまりと、その担い手となってきた「コン・ムアン」は、かつては過去の旧ランナー王国の歴史から遡及的に語られ、その文化の高尚さが謳われることが多かった。中央集権的な行政機構の下では、政治的自律を求めることは実質的に不可能だったからである。しかし1980年代後半以降、地方分権の要求、タックシンへのイデオロギ的傾倒に代表されるように、現実の政治的主張における精神的な拠り所としても語られるようになってきた。そこには「ランナー」と「コン・ムアン」という用語をめぐる、ある種の意味論的転回がみとれる。

ランナー主義の性格が、文化的主張から地方

分権の更なる要求やタックシン支持など、あからさまな政治イデオロギーの主張へと完全に移行したという単純な話ではない。双方とも併存しつつ、しかしながらその配分には、微妙な変化が表れている。全面的には文化的アジェンダが大きな割合を占めるものの、露骨にならないかたちで政治的アジェンダも噴き出してきている。背景として、彼らが中央と等しく国民としての義務を果たしてきたにも拘らず、期待していた福利厚生を思っているほどには享受できず、政府による利益還元の差配が常に中央を中心に回っている現実を目の当たりにしたことが挙げられる。当然の帰結として、人々は中央と地方間の不均衡に対して不満の声を上げることとなる。

こうした不満の声は、単発的ではあるものの、1950年代からもみられる。1956年1月20日号の『コン・ムアン』紙では、政府がタマサート大学の大学講堂建設事業に対し1900万バーツ（当時）の予算交付を決定したものの、着工後に建設計画の変更が生じ、さらに1300万バーツ（当時）の追加予算を計上したという報道が取り上げられる [cf. Kraisri 1985 : 208]。そのうえ、タマサート大学の運動施設を充実させるため、プール建設用の予算まで認可したという [cf. Kraisri 1985 : 208]。そして記事の論調は、政府の予算運営に対する強い批判へと向かう。政府予算自体、中央、地方関係なく全ての国民が等しく負担し、納めている税金から成り立っている。にも拘らず、バンコクの一国立大学の設備拡充というごく限定的な用途に税金を使用するのはいかがなものか、という疑義が唱えられる [cf. Kraisri 1985 : 208-214]。そこには、中央による中央のための利益還元の偏重に対する強い批判と、地方社会が不遇をかこっている

現状への憂いが込められている。

しかし当時、大学設立運動が北部タイの上流階級を中心に展開されていた限定的なものであるという事実が、中央-地方間の不均衡に対する不満を、あくまで局地的なものに押しとどめていたのではないか。その不均衡が人々の生活世界までさらに貫入し、目に見えるかたちで弊害をもたらした始めた1980年代になって、本格的に、具体的かつ政治的な主張と結びついていったと考えられる。ランナー主義は、時代ごとの社会情勢に乗じながら、巧みにそれを個々の目論見に織り交ぜる知識人たちによって導かれ、未だ進行中である。

注

本稿は、2016年、首都大学東京大学院人文科学研究科に提出した修士学位論文「ランナー主義—北部タイ平地社会におけるエスニシティの再領土化をめぐる一」の一部を大幅に加筆改稿したものである。加えて、公益財団法人松下幸之助記念財団「2015年度松下幸之助国際スカラシップ」および公益財団法人日本科学協会「平成29年度笹川科学研究助成」の支援により本研究は遂行された。ここに謝意を記したい。

- 1) ランナーという言葉の確実な初出は、16世紀半ばにランナーとルアンパバーンのランサーン (Lan Xang) の両地で王位に就いたランサーン出身の王が建てた碑文であり、「ランサーン」の名と対で「ランナー」の名が現れている [e.g. 飯島 1998: 104; Sarassawadee 2005 (2001): 11-13]。ランサーンは百万の象を意味するのに対し、ランナーは百万の田を意味すると解釈されている。サラッサワデーによると、ランナーという言葉は、マンラーイ朝6代王クーナー (Kuena) の治世 (1355-1385) に初めて使われ、初代マンラーイ王 (Mangrai) の治世 (1261-1311) には存在しなかったという [Sarassawadee 2005 (2001): 11-13]。
チェンマイ建都に関しては、1996年、チェンマイ県が組織した専門委員会の答申というかたちで公式見解が出される。それによると、1296年4月12日午前

4時ごろ、後のチェンマイとなる場所で、おそらく最初の建設が始まったという [e.g. Tanet 1995; 飯島 1998: 105]。公式見解の根拠とされたのは、『チェンマン寺碑文』と、『チェンマイ年代記』と通称される一連のテキストの諸本だった [飯島 1998: 105]。最重要視された『チェンマン寺碑文』は、チェンマイが既にビルマの支配下にあった1581年に建てられ、チェンマイ建都が始まったとされる1296年からは、約300年の隔りがある [飯島 1998: 106]。この碑文は、「1581年当時の過去認識の一部を示しているわけだが、その認識の元となったのは当時存在した写本年代記、或いは口頭の伝承であった可能性も高い」 [飯島 1998: 106] とされるが、初期のチェンマイについては、同時代における確実な史料を欠き、まだわからないことが多い。

『チェンマイ年代記』によると、マンラーイ王は天子ラワチャンカラートの血を引く出自を王権の正当性の根拠としていた [e.g. 飯島 1998: 117-123] のに対し、カーウイラ王は、バンコク王朝の庇護に王権の正当性を求めていた [e.g. Sarassawadee 2005 (2001): 129-131]。このように、双方の王朝の性格は大きく異なる。さらに1578年から1774年にかけて約200年のビルマによる支配を挟んだこともあり、北部タイの王朝を通時的に「ランナー王国」と呼ぶ妥当性については疑問が付される。

しかし20世紀中葉以降、ランナーという言葉は、マンラーイ王以来受け継がれてきたという通時的かつ単線的な歴史観、および「北部タイ上部に住み、カム・ムアンを使用するタイ系エスニック集団」という最大理論値に基づき、多くの人々を巻き込みうるアイデンティティとして再定位されていく。ランナー王国は歴史的に、国民国家の領域を超えた領土を有し、近隣諸ムアンとの交流も盛んであった。ただし本稿で着目するのは、20世紀中葉以降、タイ国民国家内の一地方である北部タイにおける、ネイティブの知識人たちによる「ランナー」と「コン・ムアン」というフォークタームの使い方である。よって本論中で「ランナー」という場合、断りが無い限りはタイ国民国家内の北部タイ平地社会を指し、「ランナー王国」については、マンラーイ以降の北部タイの諸王朝を通時的に括るものとして意味する。

- 2) 中国西南部のミャンマー、ラオス、ベトナムとの国境地帯から、インドシナ半島北部にかけて散在している山間盆地の多くは、タイ族の生活空間であり、彼らによって形成されていた自律的政治単位は、「ム

- アン]あるいは「ムン」と呼ばれる [加藤 2000: まえがき]。タイ族によるこうした小規模な「ムアン」ないし「ムン」は、発展の過程で連合政権のようなかたちを取ることもあり、その端緒は、一般的には13世紀まで遡るとされる [加藤 2000: 26-33]。
- 3) ヤシ等植物の葉に加工を加えたものを貝葉 (*bay laan*) といい、貝葉に宗教的なテキストや歴史的な叙述を書き記したものを貝葉文書という。
 - 4) ラムが1980年代に調査に入ったランパーン県のユアン村落では、村人たちが“pure khon muang”と自称していた [Rhum 1994: 31-32]。そこには、カーウィラ王の治世の強制移住政策に端を発する、ヨン、ルー、クーンなどに出自を持つ移民村とは差異化を図ろうとする意識が表れているという [Rhum 1994: 31-32]。
 - 5) タネートは1951年にチェンマイ県ドーイサケット郡に生まれる [Tanet 2009: 244]。父母ともに教師の家庭で育ち、チェンマイ県チェンマイ市の高校を卒業後、タイ、バンコクのチュラロンコン大学に進学し、1974年に卒業する [Tanet 2009: 244]。後の1985年にアメリカ・ワシントン州のジョージタウン大学、ロシア地域研究コースで修士号を、1989年に北イリノイ大学の比較政治学コースで博士号を取得し、1991年からチェンマイ大学政治学部に奉職する [Tanet 2009: 244]。
 - 6) クライシー (1912-1992) は中等教育をチェンマイの名門校であるプリンス・ロイヤル校で、高等教育はバンコクの有名私立校、アサンプション校で修める [Thot 2009: 66]。その後はアメリカへ留学し、修士号はハーバード大学経営学部で修める [Thot 2009: 67]。タイ帰国後は実業家として成功を収めながらチェンマイ大学にも奉職し、ランナー文化の発掘と保存に精魂を傾けた [赤木 2014: 29]。
 - 7) 『コン・ムアン』紙の創刊にあたり、ニンマーンヘーミン家の出資により有限会社ランナーカーンピム (*boorisat lannakaanphim camkat*) が立ちあげられる。編集長にはサガット・パンチョンシンが就任した。彼が編集長を歴任したのは1953年から1955年までのおよそ3年間である。1956年からはウィットット・チャイヤワンが2代目編集長に就任し、赤字経営により廃刊を迎える1978年までの約22年間、業務を務めあげた。
 - 8) 法務省官僚としてキャリアをスタートし、1971-1973年にタマサート大学学長、1973-1975年に第12代タイ国首相、1975-1998年に枢密院第6代議長を歴任するなどした学者・政治家。
 - 9) 地方中枢都市としてこの時指定されたのは、チェンマイ、コンケン、ナコンラーチャシマー、ソングラー、ハートヤイの五都市である [Tanet 1993a: 164]。チェンマイは北部タイ、コンケン、ナコンラーチャシマーは東北タイ、ソングラー、ハートヤイは南部タイに位置する。
 - 10) タイの国家行政は、「中央行政」、「地方行政」、「地方自治」の三部門から構成される。「中央行政」は首相を元首とし、内閣を中心に省、庁、局から構成される。次に、「地方行政」は県庁や郡庁を指す。その区分は、県 (*cangwat*) - 郡 (*amphoe*) - 行政区 (*tambon*) - 村 (*muubaan*) から構成される。県と郡では、内務省から派遣された県知事と郡長が、他の各省庁局からの派遣官僚を指揮監督する。地方行政はいわば、政府の出先機関の寄せ集めに過ぎない。実際には県庁内や郡役所内の水平的な連携よりも中央省庁局との垂直的な関係の方が強い。「地方自治」は、地方行政の名の下に内務省から派遣された中央官僚の、緩やかな管理下に置かれているのが実情である [綾部 2014: 50]。無論、地方自治体も政府の管理下にあり、自治体内の予算執行や条例施行に関し、県知事や郡長の承認を得なければならない。県自治体、テーサバーン (*teesabaan*: 市町) 自治体、タンボン自治体の3種類に大別され、バンコク都とパッタヤー特別市のみ例外的に独立性を持つ。中央集権的な統治形態が整備された19世紀末から1990年代までの約100年間、地方自治とはあくまで中央政府の出向機関である地方行政の、そのまた末端としての存在でしかなかった。
 - 11) チナワット家は地元チェンマイ県では名家として有名である。系譜を辿ると、ラーマ五世王の治世 (1868-1910) に中国からタイに渡ってきた客家系華人に辿り着く。タックシンは初代から数えて4代目にあたる。タックシンの祖父チアンは、チェンマイとバンコクの河川貿易や徴税請負で蓄財を成し、タイで最初の近代的なシルク工場を設立させたことで知られる。タックシンの父ブルート (チアンの三男) はランナー王国王家の系譜を継ぐナ・チェンマイ家の娘と結婚し、銀行の支店長やシルク店の経営を経験した後、1969年に国会議員に当選する。[e.g. Thot 2006: 81-115; 末廣 2009: 156-159]。
 - 12) 1997年憲法は、1992年の「流血の五月」事件を機に高まった民主化要求の帰結点といえる。憲法制定にあたり、新憲法草案の審議のみを目的に国民が議員

を選出する「憲法制定議会」が設置されるという画期的な試みも行われる。こうした経緯により1997年憲法は「人民の憲法 (*ratthathammanuun chabap prachachon*)」と称される [末廣 2009 : 90-92]。

- 13) タックシン自身、以前はタイ最大の電気通信財閥であるシン・コーポレーションの創業者兼オーナーであった。1994年の政治界への進出後も同会社の株式を55%保持し、経営面について影響力を保ち続けた。1997年の通貨危機も乗り越え、2006年1月には、タックシンは一族経営のシン・コーポレーションの全株式をシンガポールの政府系投資会社に売却し、タックシンの個人資産は2200億円を超える。同時に違法

ではないものの、一連の株式売却時に一銭も国庫に税金を支払わなかったことが取り沙汰され、タックシンの異常な蓄財に対する国民の不満が急速に高まっていく [末廣 2009 : 154-156]。

- 14) 北部タイ上部という場合には、チェンマイ Chiang Mai、チェンラーイ Chiang Rai、ランブーン Ramphun、ランパーン Rampang、プレー Phrae、ナーン Nan、パヤオ Payao、メーホーソン Mae Hong Son の八県を指す。またはターク Tak を含めた九県を指して北部タイ上部という場合もあり、用語をめぐった厳密な合意は図られていない。

【引用文献】

- Kraisri Nimmanhaeminda 1965 “Put Vegetables into Baskets, and People into towns”, *Ethnographic Notes on Northern Thailand*, L.M.Hanks et al.(eds.), pp.6-9, Cornell University.
- 1966 “Hamyon, The Magic Testicles”, *Artibus Asiae Supplementum*, 23(2): 133-148.
- Lebar, Frank M.(eds.) 1964 “YUAN”, *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*, pp.136- 159, Human Relations Area Files.
- McGilvary, Daniel 2001(1912) *A Half Century Among the Siamese and the Lao: An Autobiography*, White Lotus.
- Rhum, Michael R. 1994 *The Ancestral Loads: Gender, Descent and Spirits in a Northern Thai Village*, Northern Illinois University.
- Sarassawadee Ongsakul 2005(2001) *HISTORY OF LANNA*, Silkworm Books.
- Anonymous 2014a “Daeng Rap Lao! Tang Soo Poo Poo Lanna Khui Maa 6 Duan”, *Khom Chat Luk*, 2014/03/01. <http://www.komchadluek.net/news/politic/179996> (2018年1月25日閲覧)
- Anonymous 2014b “Pechawat Chiicaeng Mai Mii Neeo Khit Yeak Prateet: Suu Sanue Khlaatkhluan”, *Prachathai*, 2014/03/04. <http://prachatai.com/journal/2014/03/52073> (2018年1月25日閲覧)
- Anonymous 2014c “Puetcai “Soo Poo Poo Lanna” Saakhaa Sankamphaeng Kap Khoo Klaao Haa Yaek Prateet”, *Prachathai*, 2014/03/06. <http://prachatai.com/journal/2014/03/52127> (2018年1月25日閲覧)
- Aroonrut Wichienkeo 1991 “Neeo Khit Thaang Kaan Muang: Khwaam Samphan Rawaang Rabop Phanna Rabop Naai Sip Lae Rabop Chon Prathaan”, *Eekasaan Ruam Botkwaam Caak Kaan Prachum Lanna Thaang Wichaakaan Lannakhadii Suksaa: Lookathat Chaao Lanna*, pp.1-17, Saha Witthayaalai Lanna.
- 2000 ““Khon Muang”: Nai Tamnaan Prawattisaat”, *Khon Muang Nai Thaam Klaang Booribot Kaan Prianplaeng*, Tanet Charoenmuang et al.(eds.), pp.37-44, Mahaa Witthayaalai Chiang Mai.
- Bunchuai Siisawadee 2008(1950) *Saamsip Chaat Nai Chiang Rai*, Samnakphim Siam.
- Chayan Vaddhanaphuti 2000 ““Khon Muang”: Tuaton Kaan Pharit Sam Saang Mai Lae Phuun Thii Thaang Sangkhom Khoong Khon Muang”, *Khon Muang Nai Thaam Klaang Booribot Kaan Prianplaeng*, Tanet Charoenmuang et al.(eds.), pp.83-116, Mahaa Witthayaalai Chiang Mai.
- Kraisri Nimmanhaeminda 1985 “Rao Tongkaan Mahaa Witthayaalai (Prawat Haeng Kaan Dai Maa Sung Mahaa Witthayaalai Chiang Mai)”, *Laaikhraam*, pp.199-214, Suun Nangsuu Chiang Mai.
- Lamchun Huapcharoen 2011 *Rwang Naa Ruu Khuu Lanna*, pp.43-55, Duankamon Publication.
- Suraphon Damrikul 1999 *Lanna: Singwaetloom Sangkom Lae Watthanatham*, Khroongkaan Suepsaam Mooradook Watthanatham Thai.
- Tanet Charoenmuang 1993a *Maa Caak Lanna*, Samnak Phim Phuu Cat Ngaan.
- 1993b *Wathanatham Lomsalaai: Poo Koo Muang, Mae Koo Muang, Luuk Uu Kam Muang Ba Caang*, Khroongkaan Suksaa Kaan Pokkroong Thoong Thin, Khana Sangkhomsaat, Mahaa Witthayaalai Chiang Mai.

- 1995 *Chaloong Chiang Mai 700 Pii Luak Tang Naayok Teesamontory Dooi Trong*, Khroongkaan Suksaa Kaan Pokkhroong Thoong Thin, Khana Sangkhomsaat, Mahaa Withayaalai Chiang Mai.
- 1997 *Kaan Pokkhloong Muang Nai Sangkhom Thai: Karanii Chiang Mai 7 Sattawat*, Khroongkaan Suksaa Kaan Pokkhroong Thoong Thin, Khana Sangkhomsaat, Mahaa Withayaalai Chiang Mai.
- 2009 *Khon Muang: Prawattisaat lanna samai mai*, Urban Development Institute.
- Thot Kananaporn 2006 *9 trakuun dang haeng lanna*, Nation Books.
- 赤木功 2014 「パイパイマー ປາຍປາຍ (51) : ランナー人民民主共和国一分離主義の背景—」『タイ国情報』48 (2) : 25-31。
- 綾部真雄 1993 「タイ北部山地民社会と平地政体 : 『国境』の成熟へ呼応した〈チャオ・カオ〉の形成」『社会人類学年報』19 : 65-90。
- 飯島明子 1998 「ランナーの歴史と文献に関するノート」『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』新谷忠彦編、pp.104-146、慶友社。
- 2014 「ラワータイ関係をめぐるナラティブとメタ・ナラティブ」『東南アジア大陸部 山地民の歴史と文化』クリスチャン・ダニエルズ編、pp.55-106、言叢社。
- 片岡樹 2002 「もうひとつの「もうひとつの知」—山地民ラフにおける神義論とカリスマ—」『年報 タイ研究』2 : 45-59。
- 加藤久美子 2000 『盆地世界の国家論—雲南、シブソンパンナーのタイ族史』、京都大学学術出版会。
- 北原淳 1996 『共同体の思想—村落開発理論の比較社会学—』、世界思想社。
- 末廣昭 2009 『タイ : 中進国の模索』、岩波新書。
- チャティップ・ナートスパー 1992 「タイにおける共同体文化論の潮流」『国立民族学博物館研究報告』17 (3) : 523-558。
- トンチャイ・ウイニッチャクン 2003 (1994) 『地図がつくったタイ』石井米雄訳、明石書店。
- 永井史男 2012 「タイの地方自治 : 「ガバメント」強化の限界と「ガバナンス」導入」『変わりゆく東南アジアの地方自治』船津鶴代他編、pp.105-133、アジア経済研究所。